

黄道十二宮の星座名について

吉野政治

はじめに

天球における太陽の軌道を黄道と言い、黄道の南北幅八度の帯を黄道帯と言う。また、黄道が天の赤道と交わる一つの点を春分点と言い、春分点を始発点とする一周三百六十度の黄道帯を三十度ずつに分けたものを黄道十二宮⁽¹⁾と言い、各宮に存在する星座名をそれぞれの宮名としている。現在の日本では黄道十二宮は次のような和名と漢名が用いられている。学術名（ラテン語）も合わせて掲げる。

【和名】	【漢名】	【学術名】
おひつじ座	白羊宮	Aries
おうし座	金牛宮	Taurus
ふたご座	双児宮	Gemini

かに座	巨蟹宮	Cancer
しし座	獅子宮	Leo
おとめ座	処女宮	Virgo
てんびん座	天秤宮	Libra
さそり座	天蠍宮	Scorpius
いて座	人馬宮	Sagittarius
やぎ座	磨羯宮	Capricornus
みずがめ座	宝瓶宮	Aquarius
うお座	双鱼宮	Pisces

本稿の目的は、いつ頃日本に黄道十二宮が伝来したのか、それぞれの宮の星座はどのような形で、どのように呼ばれていたかを明らかにすることである。

1

日本における黄道十二宮またその星座名の歴史をたどる前に、古代中国における星座の捉え方や天域の設定の仕方を簡単に見ておきたい。江戸時代に西洋の天文学が知られるようになるまで、日本は中国天文学に専ら拠っていたからである。

中国の天域は北極中心に考えられている。紀元前百年頃に成立した『史記』の天官書では全天を五つの領域に分け、北極を囲む星座域を中宮とし、その他の星座域を七つずつ東西南北に分けて四宮とした。四宮に属する星座の名は次のとおりである。これを二十八宿と呼ぶ。

角・亢・氏・房・心・尾・箕（以上東方七宿）

斗・牛・女・虚・危・室・壁（以上北方七宿）

奎・婁・胃・昴・畢・觜・參（以上西方七宿）

井・鬼・柳・星・張・翼・軫（以上南方七宿）

また、春秋時代の初め頃から北極を中心として方位を十二等分し、それを十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）で呼ぶことも行われていた。したがって、黄道も十二等分されて十二支に配されている。ただし、黄道十二宮の

順序と十二支の順序は逆になる。黄道十二宮は天体の廻転に随って西から東へと廻るのであるが、十二支は南面して東から西への順序で配されている。後の時代のものであるが、清代の初めに成った游子六（游芸）の著『天経或問』（康熙十四年1675?序）に次のように見える。

今定二周天一為二四象限一。限設二三宮一、宮分三三度一。

大約白羊宮初度、交二壁初度一。金牛宮初度、交二婁五度一。

陰陽宮初度、交二昴七度一。

巨蟹宮初度、際二參末井初一。獅子宮初度、交二井三十度一。

双女宮初度、交二張七度一。

天秤宮初度、交二軫初度一。天蝎宮初度、際二亢初度一。

人馬宮初度、交二房三度一。

磨羯宮初度、交二箕三度一。宝瓶子初度、交二牛初度一。

双鱼宮初度、交二危三度一。

（地巻「度属不同」）

さらに中国では天の赤道を十二等分して十二次（星紀・玄枵・娵訾・降婁・大梁・実沈・鶉首・鶉火・鶉尾・寿星・大火・析木）とした。『明史』の天文志では、この十二次の名を十二宮の名として用いている。黄道十二宮は黄道を分けるもの

であり、十二次は天の赤道を分けるものであるからこの代用には無理があるが、これは中国の伝統的天文学の西洋化に反発する守旧家への刺激を和らげるためであつたろう言われている。⁽³⁾

2

さて、西洋の天文学は占星術とともに発達した。西洋占星術は紀元前三千年頃から遅くとも紀元前一千年頃までにバビロニアに発したとされる。バビロニアでは五星（水星・金星・火星・木星・土星）を神の意志を伝える「告知者」と呼ぶとともに、黄道を三十六に区分し、その一区分に一星を配して「助言する神々」とし、三星の一つを「神々の首長」と呼んだ。その十二の首長に黄道十二宮の符号が配され、十二宮に当たる星座も造られたが、その星座のうち、天秤・牡牛・双子・蠍・射手の六座は現在用いられているものと同じであるという。⁽⁴⁾このバビロニアの占星術はイスラム文化圏へ伝わり、イスラム文化圏からヘレニズム文化圏へ、さらにインドへと伝わったとされる。インドでは釈迦（B. C. 563-487）の弟子光味・驢唇・文殊などが十二宮を十二神と観じ、十二月に配当して、日月五星（七曜）・二十八宿とともに人類の守護神とした。⁽⁵⁾これが仏教の伝

播に伴って中国へも伝わっていったが、唐の時代にはインドから善無畏・金剛智・不空らの密教僧が中国に渡り、新しい経典を訳出している。注目したいのは、その新しい経典の中に不空訳の『文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶善惡宿曜經』（略して『宿曜經』）があることである。この『宿曜經』は密教と陰陽道が呪術的な思想や方術を通じて結びついた思想を説くものであり、十二宮二十八宿を解説し、星宿と人生、七曜と人生の関係も説かれているが、大同二年801に空海が帰朝した時に持ち帰った経典の中に、この『宿曜經』があつた。

日本に最初に十二宮が現れるのは、この密教の、星曼荼羅の中においてである。佐和隆研編『密教辞典』（法蔵館、昭和五十年1975刊）の「十二宮」には次のような説明と図（附図1）がある（次にその説明を掲げるが、各尊を一字で表示した梵字「種子」の説明は省く。宮名の前の数字は『密教辞典』に付けられているものである。附図によって、それぞれの宮の形を知る際に便利なので省かずに記す）。

東方

227 牛密宮(Bṛasā) … 異称… 密牛宮・金牛宮・牛宮。 形象



【附図1】東寺伝真言院胎藏界曼荼羅の十二宮図像 (佐和隆研編『密教辞典』法蔵館より)

…臥した牡牛。

- 228 白羊宮 (Mesha) … 異称… 羊宮。形像… 臥した羊。
- 229 夫婦宮 (Mithuna) … 異称… 男女宮・姪宮。形像… 菩薩形2尊 (一尊は蓮上珠を持)。

南方

- 245 磨羯宮 (Makara) … 形像… 大魚が口を張り尾をあげる

相で鯢しやちに似る。

- 246 賢瓶宮 (Kumbha) … 異称… 宝瓶宮・罍しぼり宮。形像… 宝瓶に蕾蓮華3個。
- 247 双魚宮 (Mina) … 異称… 魚宮・二魚宮。形像… 2魚が対向して游泳する相。

西方

- 293 秤宮 (Tula) … 異称… 秤量宮・天秤宮。形像… 仙人風の老人が裸体で歩きながら秤を持つ相。
- 294 弓宮 (Dhanu) … 異称… 天弓宮・人馬宮じんば。形像… 弓矢を持って少女の歩行する相。下半身を馬とする旧図もある。

- 295 蝎虫宮 (Vreelika) … 異称… 天蝎宮。形像… 蝎せみが尾をあげた相。

北方

- 354 少女宮 (Kanya) … 異称… 双女宮・室女宮。形像… 菩薩座像で、右腕は肘を曲げて前に手を上げ、左拳は上向けて腰に置く。

- 355 螃蟹宮 (Karkataka) … 異称… 巨蟹宮。形像… 巨蟹の相。
- 356 獅子宮 (Simha) … 形像… 白獅子が走る相。

京都東寺の伝真言院胎藏界曼荼羅は空海が帰朝した時に持ち帰った初伝本の正統に属するもので、その様式は「平安朝前期の最末期ころに置かれうるべきもの」と言われるが、その外縁「外金剛院」の四方に右の『密教辞典』の図とほぼ同じものが東西南北に三座ずつ描かれている。また、その伝来の経路については不明であるが、奈良法隆寺には隋時代の仏師鞍作止利の作と伝えられている星曼荼羅がある。⁽⁷⁾中央の内院に阿弥陀如来が坐し、第二層上部に北斗七星、下部に九曜を配し、第三層に十二宮、最外層に二十八宿（二十八星神）が描かれているが、⁽⁸⁾その第三層の十二宮の図像も東寺の伝真言院胎藏界曼荼羅とほぼ同じである。

空海の後、真言密教では常暁や恵運が入唐し、新しい宿曜道の經典や図像・彫像を持ち帰った。北辰（北極星）や七曜（日月五星）をまつるには、本尊として尊星曼荼羅・妙見曼荼羅・北斗曼荼羅などと呼ばれる曼荼羅図が作られるが、⁽⁹⁾北斗曼荼羅には円曼荼羅と方曼荼羅とがある。前者の代表的なものは前述の法隆寺のものであるが、後者は大阪府久米田寺に平安朝の仏画として保存されているものが代表的なものとされる。⁽¹⁰⁾これは

中央の頂輪王をめぐって仏眼尊と北斗七星を置き、その外側に九曜、その外側に十二宮二十八宿がとりまく形である。以上の星曼荼羅に描かれている図像はいずれもはほぼ同じであるが、いくらかの違いが見えるものもある。偶々管見に入った山口県萩市見島讚岐坊（真言宗）所藏の方曼荼羅は、「秤宮」は秤だけが描かれ、「弓宮」も弓と矢だけが描かれ、「師子宮」は唐獅子風のものゝ座り、「少女宮」には二尊が描かれている。

さて、星曼荼羅に描かれた十二宮はどのような名で呼ばれていたのか。先に引用した『密教辞典』に記されている「牛密宮（Brah）」などの名は何時頃のものであり、併せて記されている「密牛宮・金牛宮・牛宮」などの異称はどのような経緯で成立したものであろうか。これらは一切不詳であるが、江戸中期に書かれた天野信景の『塩尻』に「密家胎曼多羅」の名称として、

○十二宮所レ属云々

按、密家胎曼多羅有二宝瓶、磨羯、人馬、天秤、双女、獅子、巨蟹、陰陽、金牛、白羊、双鱼十二宮。是金星者流談命家之名目、而密家私爲己之家事。

と見える。ここに見られる名は『明史』（清・洪武十六年1383成、張廷玉等撰）卷三十七「曆志」に「洪武初得三於二元都一

(中略) 命ニ翰林李狷吳伯宗同回回大師馬沙亦
黑等ニ訳ニ其書ニ」とあり、

宮数 白羊初 金牛一 陰陽二 巨蟹三

獅子四 双女五 天秤六 天蝎七

人馬八 磨羯九 宝瓶十 双鱼十

一

とあるものと同じである。⁽¹²⁾ 明代以降 (1368)

中国の天文学ではこれらの名が用いられており、

朝鮮製の天文図でも太祖四年 (1395) に造られた

石刻星図「天象列次分野之図」を始めとしてこ

の名が見られるようであるが、日本ではもっぱら

右に見たように密教の世界でのみ用いられていた

ようである。現存する日本製の天文図には現れない。⁽¹³⁾

3

江戸初期には前節に見た密教系のものとは別に西洋天文学の十二宮がおよそ四つの経路で伝わったようである (西洋星座図の一例として、一五一五年に画かれたデューラー星座図を掲げ



【附図2】 デューラーの北半球星座図 (野尻抱影編『星座』恒星社厚生閣刊より)

ておく【附図2】。一つは南蛮航海術の習得により、二つはキリスト教イエズス会のコレジオ（学林）などで用いられた教科書により、三つは在華イエズス会宣教師による漢訳天文書の輸入により、四つはオランダ人から直接に、あるいはオランダ語で書かれた天文学書によるものである。以降、この四つの系統それぞれの事例を掲げ、若干の考察を加えることにする。

3-1-1

一つめの南蛮航海術によるものは、『元和航海書』（元和四年1618自序、寛永七年1630加筆）に見られるものである。この書は池田与右衛門が「葡萄牙人マヌエル・ゴンザロ Manuel Donzalo」といふ本邦在留の航海貿易家に就いて航海の術を学び、呂宋や暹羅と長崎との間の航海を誌し、緯度の測量や、気象の観測、海深の測定などをはじめ、暦日・星辰・風位・海潮等に関し、或は機械を示しつゝ、或は経験に依りつゝ、航海に関する種々の心得ぐさを記載したものであるが（新村出監修『海表叢書』更生閣書店、昭和三年1928刊、新村出解説）、その「四つのデキリナサン」（四年ノ日々記ト云義也）という注がある）の説明の中に次のようにある（本文は『海表叢書』によ

る）。

一 マルツと云月の廿一日、廿二日（日本の二月の中の比）に、日輪、エキヌシアルと云中すちにあり、アリエスと云羊の宿の初に入。同月の廿三日より、日輪北に向つてゆく。

一 ジウニヨト云月の廿二日、廿三日（日本の五月の中の比）には、中すちより北へ廿三ガラフ半の処、（廿三段半也）リイネヤ（すちと云こと）サヴナ（かでんと云こと）テンペラアダ（中庸と云事）と云すちに至る也。カンセルと云蠨の宿也。同月の廿四日より、北から中すちへ日輪もどる。

一 セテンプロと云月の廿三日（日本の八月の中の比也）に、日輪、エキヌシナルと云すちにあり。リイブラと云天秤の宿の始也。同月の廿三日より日輪、エキヌシナルと云すちより南へ向てゆく。

一 テゼンプロと云月の廿三日（日本の十一月、中の比、冬至のまへ）には、日輪南のサヴナ、テンペラアダに至る。（中すちより南へ廿三半のとこひなり）カピリ

カウルニヨと云野牛の角の宿。同月の廿四日より、日輪南より中へもどる。

アリエス Aries、カンセル Cancer、リイブラ Libra、カピリカウルニヨ Capricornio は、春分・夏至・秋分・冬至の時に太陽が位置する所にある星座である。このうちアリエスは「日をとる事」（ナンバンにトマンラルと云、日をとると云こと、日本にては日をはかると云べきなり」という注がある）の段にも次のように「アリエスのシイノと云羊の宿」と見える（シイノ Signo は宿の意）。

一 日輪生得の廻りは、西より東へ廻ること、マルソへナンバンの三月也の廿二日（日本二月の中より二日前、日夜等分）アリエスのシイノと云羊の宿より廻り初て、明年の同月の廿一日には、同宿に廻着、日数三百六十五日六時（日夜、廿四時に配するの六時也）に粗至に依て、一年を三百六十五日に定、四年に一日の潤を加ふ。

カンセル（かに座）は「蠨の宿」とあるが、『日本科学古典全書』（朝日新聞社刊）の「蠨の宿」の翻刻に従うべきであろう。「蠨」は、「蟹」の異体字。「蠨」は『説文』に「蠨、蟲在二牛馬皮一者、从レ虫翁聲」とあり、『玉篇』に「蠨、小蜂」とあつて、アブ（虻）を意味するようである。また、カピリカウルニヨ（やぎ座）は「野牛の角の宿」と説明されているが（¹⁴『日葡辞書』に「Yagu ヤギウ（野牛）Zono vxi（野の牛）牡山羊あるいは牝山羊」とある）、曼荼羅では「大魚が口を張り尾をあげる相で鯪しやちに似る」怪魚の形で描かれていた。この形は古代バビロニアの標石に既に現れているが、ギリシャ神話では羊と羊飼いの守護神のパーンが怪物に追われて河に飛び込んだ際に、水に漬かった下半身は魚の形になり、上半身は山羊の形になったとされ、その姿が星座になったものである。この形は日本人には理解しがたかつたようで、後に見るように蘭学者たちもスコルピオン（さそり座）と混同しているものが見られる。ちなみに、このカピリカウルニヨをめぐる東西の不可思議な形について石田五郎氏は「密教は十二宮を天部の格で教義体系に組み込んだのであろうが、この姿が密教と西洋占星術の接点を示すような気がしてならない」と言われる¹⁵。

長崎在住の西川如見もまた南蛮紅毛貿易によって伝わった黄道十二宮のことを知り、その図像も見ていたようである。『天文義論』（正徳二年1731序）に「今來紅毛人持渡れる処の星図を看るに、其の星の形皆獸類の像に配して、其の星の様体、唐土の名づくる形には非ず…戎蛮紅毛等星宿を以て獸形と為る事は、中華に於て三十六禽を定めて星宿に配して方角を主とらしむるに似たり」（乾卷）とあり、（正徳四年1734序）にも同様の文章が見え、さらに卷之一「紅毛十二宮名号図解」に各宮の説明が次のようにある。

宝瓶 アンハアリヨス ワアトルダラアカル 人水器ヲ捧
テ水ヲ溢ス
磨羯 カアペル ボツコ 野牛ノ形ヲ画ス
人馬 サギタアリヨス ホウゴメンス 人弓ヲ持テ馬ニ乗
天蝸 シゴルヒヨス スコルピオン 青キ蜈蚣ノ形
天秤 リフラ ピンパン 金銀掛ル天ピン
双女 ヒルゴ ウエイヒ 両女立双ベリ
獅子 レウヲ レウウ 獅子獸ノ形
巨蟹 カンケル トロウピスケレウ 赤キ大蟹

黄道十二宮の星座名について

陰陽 キミニ テペーワンギ 双児ノ形

金牛 タウリス ヲウス 異牛ノ形

白羊 ア、リヤス シカアペン 白キ羊ノ形

双鱼 ビシス テペーエヘイン 二魚ノ形

さらにこの図の下に次のような説明があり、中国の次名と西洋の黄道十二名の関係が次のように書かれている。

十二宮各有二宮名ト次名一。紅毛等ハ唯用二宮名一而不レ用二次名ヲ一歟。未ダレ知ニ其号名ヲ一。雖レ然、視ミバレ所ヲ二図画ス一則在ニ鶉首鶉尾等之次禽一何ゾ莫ニ其次名一乎。蛮語之名各有ルニ二宮二名一者、以ニ紅毛語蛮語之ニ名ヲ一乎。又其宮ト次ノ兩名乎。

『明史』の天文志では黄道十二宮の名を十二次に当てたことは先に述べたが、次名と黄道十二名の関係については如見の子である西川正休の『大略天学名目鈔』（享保十五年1730刊）にも次のように触れられている。

十二宮ヲ一宮各々ニツニ分テ、宮次ノ名ヲ、古人定メ置キヌルコト、最深キ理有ン。其名左ノ如シ。

子宮 宝瓶 次 玄枵
丑宮 磨羯 次 星紀

寅宮	人馬	次	析木
卯宮	天蠍	次	大火
辰宮	天秤	次	寿星
巳宮	双女	次	鶉尾
午宮	獅子	次	鶉火
未宮	巨蟹	次	鶉首
申宮	陰陽	次	実沈
酉宮	金牛	次	大梁
戌宮	白羊	次	降婁
亥宮	双鱼	次	娵訾

西川親子が用いた黄道十二宮の名は『明史』の回回曆法に見えるものであり、後に見る在华イエズス会宣教師たちが用いたものとは一部異なっているが、そのことは次節以降に述べることにする。

312

第二のイエズス会のコレジオ(学林)などに用いられた教科書によると考えられるのは、小林貞謙(1601-1683)の『二儀略説』(寛文七年1667成?)に見られるものである。この書は

ペドロ・ゴメス (Pedro Gomez1535-1600) が日本のコレジオの教科書として起草したと云う『講義要綱』Compendiumの第一部「天球論」(De Sphaera)の内容を伝えるものとされる。⁽¹⁶⁾したがって、本書に見られる星座名はラテン語で書かれた『講義要綱』を訳す時に考えられたものであろう。星座名は漢名が用いられているが、同じ星座に複数の名が見られるものがあり、日本における星座名の歴史を探ろうとするのには貴重な資料である(本文は岩波日本思想大系63『近世科学思想 下』による)。例えば、

右ノ黄道ヲ十二分ニワリテ、其一ヲ宿ト号シ、十二獸ノ名ヲ付タリ。一宿各三十度ナリ。獸ノ名ヲ付タルコト、十二宿星ノナラベル形、其獸ニ似タルユヘナリ。

羊宿・牛宿・二子宿・蟹宿・獅子宿・小女宿 コノ六宿

ハ北ニアリ。

天秤宿・竜宿・射手宿・野牛宿・流水宿・魚宿 コノ六宿ハ南ニアリ。

此等ノ宿ニ随フテ、四節隔テ分レタリ。太陽、白羊・金牛・双児ヲ通ル間ハ春ナリ。巨蟹・獅子・室女ヲ通ル間ハ

夏ナリ。天秤・天蠍・弓馬ヲ通ル間ハ秋ナリ。磨羯・流水・大魚ヲ通ル間ハ冬ナリ。

(第三 諸層宿巡環ノ不同ヲ顯ハス輪線ノ事)

という箇所でも「双兄弟」は「二子宿」とも呼ばれ、「室女宿」は「小女宿」とも呼ばれている。別の箇所でも同一の宿が別名で呼ばれているもの多く見られる。それらを整理すると次のようになる。

白羊宿・羊宿

金牛宿・牛宿

双兄弟宿・兄弟宿・二子宿

巨蟹宿・蟹宿

獅子宿

室女宿・小女宿

天秤宿

天蠍宿・竜宿

弓馬宿・射手宿

磨羯宿・野牛宿

流水宿

大魚宿・魚宿

最上段に掲げたものは明の神宗の萬曆の初め(西曆一五八〇年頃)に中国に入ったイエズス宣教師利瑪竇(マテオ・リッチ Mateo Ricci)による『坤輿萬国全図』(一六〇二年成)の「天地儀」に見えるもの(白羊・金牛・双兄弟・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蠍・人馬・磨羯・宝瓶・双魚)と同じものである。したがって、次節で取り上げる在華イエズス宣教師による漢訳天文書からの例とすることもできるが、この書ではそれは『講義要綱』を訳す際の参考書の一つとして利用されただけであり、それ以外のものからも広く拾われていることが注目されるのである。

すなわち、『坤輿萬国全図』に見られる名は『明史』の「回回曆法」に見えるものと、ほぼ同じであるが、GeminiとVilgoの名だけが異なる。「双兄弟」Gemini・「室女」Vilgoは「回回曆法」では「陰陽」・「双女」とあった。おそらく利瑪竇は十二宮名を漢訳するにあたって「回回曆法」を参考にしたものと思われるが、この二宿については西洋における星座の形によって名前を変えたのであろう。そうであれば、『二儀略説』にこの「双兄弟」・「室女」の名が見られることは、この書に利瑪竇系の知識

が流れ込んでいることを意味することになるが Sagittarius、Aquarius、Pisces には『坤輿萬国全図』の名とは異なる「弓馬・射手」「流水」「大魚・魚」の名を用いている。また、『坤輿萬国全図』と同じ名が現れる宮名でも、それとは異なる名も用いられているものがある。Gemini の「兄弟・二子」、Virgo の「少女」、Scorpius の「竜」、Capricornus の「野牛」がそれである。すなわち『二儀略説』に現れる十二宮名の出所は一つではないのである。

具体的に星座の形について見てみると、Aquarius は西洋の古星座図では人に横抱きされた瓶から大量の水が流れている形である。「流水」の名はその形によるものであろう。「磨羯」の別名として見える「野牛」は『元和航海書』にも「野牛の角」とあったが（また次節に挙げる『紅毛談』にも見える）、ほぼ同じ頃に刊行された松永貞徳『油槽』（寛永二十年 1653 刊）に「かしらも鬚もぬれ渡りけり」という前句に「獅子やぎう（野牛）さても書たる油絵に」と付けた句がある。新村出博士はこれから『伊曾保物語』の「獅子王、羊、牛、野牛の事」の寓話を想像されているが（『西洋文学の嚆矢——文禄旧訳の伊曾保物語——）、あるいは十二宮の「獅子」「野牛」と「流水」と

に關係するのではなからうか。¹⁷⁾ これらは西洋星座図との関わりが考えられる名であるが、「天蠍」の別名として見える「竜」は中国古来の天文思想に基づくものようである。新城新藏著『よみと天文』（昭和三年 1928 十月弘文堂書房刊 p.180）に次のような説明がある。

辰は本来は「民に時の早晚を知らすために觀察する標準の星」といふ意味の星であるが、仲夏五月の節を正すための目標となつて居た大火（蠍座の一等星）が、殷の時代を通じて、時節を正すための最も主もなる觀測物即ち辰とされて居つたので、遂に辰の名を独占するに至り、辰といへば大火で即ち五月の星であるといふ程になつて居つたために、辰を以て五月の符号としたものである。なほ後に動物を配当するに当り、辰に龍を配当したのは、大火（蠍）の付近の星像が頗る著しき形で、これを龍なる仮想的動物に見立てたがために外ならぬ。

さらに『二儀略説』に見られる十二宮名には和名との關係で注目されるものがある。「射手」「二子」は「いて」「ふたご」の漢字表記であらうし、あるいは「おとめ」と「少女」も同様

の関係にあるものと思われる。「しし」「てんびん」は漢語名をそのまま用いたものである。さらに「羊」「牛」「蟹」「魚」は「白羊」「金牛」「巨蟹」「大魚」を略した言い方であるとする、「おひつじ」「おうし」「かに」はこの略称と関係するものと思われる。「さそり」と「天蝸」も同様であろう。ただ、「みずがめ」の名は『儀略説』に見える「流水」の名からは出てこないであろうから、これのみは密教あるいは『坤輿萬国全図』に見える「宝瓶」との関係が考えられる。

以上のように考えられるとすれば、現在用いられている和名の萌芽は江戸時代初期には認められると言えそうである。ちなみに「○○宿」が「○○座」と呼ばれるようになったのは明治以降のことと思われる（ただし、「星座」という名は『史記』の天官書に既に見える）。

3-1-3

第三の在華イエズス会宣教師による漢訳天文書の輸入によって得られたものと考えられるのは、井口常範『天文図解』（元禄元年1688成）の巻一に載せる「天地儀」の図の黄道に、白羊・金牛・双兄・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝸・人

黄道十二宮の星座名について

馬・磨羯・宝瓶・双魚

と書かれてあるものである。これらの宮名は利瑪竇の『坤輿萬国全図』に見えるものとまったく同じである。ただ、日本では在華イエズス宣教師の伝えた西洋天文学の知識は第1節に引用した游子六の『天経或問』（康熙十四年1675?序）に依るのが一般である。『天経或問』は方密之の序によると、イタリヤ人宣教師熊三拔 (Sabatin de Ursi) に西洋天文学を教わったとされ、本文には利瑪竇や艾儒略 (Julius Aeni) などの著作から多く引用されているものである。この『天経或問』が利用されなかったのは『坤輿萬国全図』の用語が既に定着していたからであろうか、西川正休による和刻本『天経或問』が出されたのは享保十五年1730のことである。『天経或問』に見える名称は『明史』に見えるものと同じであり、利瑪竇『坤輿萬国全図』また井口常範『天文図解』は「双兄」に「陰陽」が用いられ、「室女」に「双女」が用いられているのが特徴である。

3-1-4-1

第四のオランダ人から直接に、あるいはオランダ語で書かれた天文学書によって得られたと考えられる十二宮の知識の例は

多く拾うことができる。管見に入った明治以前のもので、十二宮のすべての名が記されているものを年代順に列挙れば次のようになる。

○青木昆陽『和蘭文字略考』（延享三年1746成）巻之二・

単語帳

白羊 arius アリユス ・金牛 taurus タウリユス ・双児
genii ゲミニ ・巨蟹 cancer カンセル ・獅子 leo レ
オ ・室女 virgo ヒルコ ・天秤 libra リブラ ・磨羯
scorpius スコルピユス ・人馬 sagittarius サギツタリ
ユス ・天蝎 capricornus カプリコルニユス ・宝瓶
aquarius アクワリユス ・双鱼 pisces ピシセス

※「磨羯」と「天蝎」の名を誤っているようである。

○後藤梨春『紅毛談』（明和二年1765刊）

○子の方をおらんだにて、あくはありよすといふ、おらんだの正月氣にして、日本冬至の終より大寒にいたる、其形壺人手に瓶壺を奉て、水をこぼす形を画す、

○かあべる、是十二月の氣にして、日本大雪冬至の節に当

れり、其形野牛の形を画せり、

○さぎたありよす、是十一月の氣にして、日本の立冬小雪の間に当れり、其形壺人馬上に、弓矢を持たる形を画せり、

○じごるひよす、是十月の氣にして、日本秋分寒露に相当る、其形青色の大蛇蝎のごとき大虫の図なり、

○りふら、是九月の氣にして、日本の白露秋分の終に当れり、其形金銀をかける天秤の形を画す、

○ひるご、是八月の氣にして、日本大暑より処暑までに当れり、其形双べる女二人を画たる形なり、

○れを、是七月の氣にして、日本の大暑小暑の節なり、其形獅子の形を画す、

○かんける、是六月の氣にして、日本芒種より夏至までに当れり、其形赤きいろの大蟹の形を画せり、

○きみに、是五月の氣にして、日本立夏小満の節に当れり、其形双児の形画たるものなり、

○たうりす、是四月の氣にして、日本の清明穀雨の節に当れり、其形異形なる牛を画たり、○あ、りやす、是三月の氣にして、日本啓蟄より春分の節に当れり、其形白き

羊を图画せり

○びしす、是二月の氣にして、日本の立春雨水の節に相当り、其形二魚をならべたるを絵図せり、

是十二にて、日本の子より亥までの十二支に相当れり、

(寛政四年 1790 成)

白羊・金牛・双兄・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蠍・人馬・磨羯・宝瓶・双鱼

(第三、四、六の板の図)

○三浦梅園『帰山録』(安永七年 1778 成)

白羊・金牛・双兄・巨蟹・獅子・列女・天秤・天蠍・人馬・磨羯・宝瓶・双鱼

太陽は北方の六宮、白羊・金牛・双兄・巨蟹・獅子・室女の宮を通行して、
南方の六宮、天秤・天蠍・人馬・磨羯・宝瓶・双鱼の宮を通行して、太陽は白羊宮の初点Hの符号の所に視るなり。
(第四十二章)

○前野良沢『和蘭訳筌』(天明五年 1785 成)

デ タワアルフ 十二 テェケン 紀 ハン之 デン 発

語辞 ソヂアカ道 (即黄道ノ十二宮ナリ)

アリウス 白羊 タウルス 金牛 ゲミニ 双女

カンセル 巨蟹 レオ 獅子

ヒルゴ 室女 リブラ 天秤 スコルピオ 天蠍

サギタリウス 人馬 カプリコルヌス 磨羯 アクワ

リウス 宝瓶 ピスセス 双鱼

○司馬江漢の『天球全図』(寛政八年 1796 刊)

「彼国ノ法ニシテ黄道ノ列星ヲ十二ノ宮ト名ツケテ、則十二宿ニシテ廿八宿ノ如シ」とあり、図に次の星座名が書きこまれている。

白羊宮・金牛宮・陰陽宮・巨蟹宮・獅子宮・室女宮・天秤宮・天蠍宮・人馬宮・磨羯宮・宝瓶宮・双鱼宮

○中島中良(熊秀英)『蛮語箋』(寛政十年 1798 成)

白羊宮 春分 戌 アリウス

○本木良永『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』

黄道十二宮の星座名について

金牛宮 穀雨 酉 タウリユス

双女宮 小満 申 ゲメーニ

巨蟹宮 夏至 未 カンケル

獅子宮 大暑 午 レヲ

室女宮 処暑 巳 ヒルゴ

天秤宮 秋分 辰 リブラ

磨羯宮 霜降 卯 スコルピス

人馬宮 小雪 寅 サギッタリウス

天蠍宮 冬至 丑 カプリコルニユス

宝瓶宮 大寒 子 アクワリウス

双鱼宮 雨水 亥 ヒスセス

※この書においても「磨羯」と「天蠍」の名を誤って
いるようである。

○本田利明『西域物語』（寛政十年1798成）

欧羅巴洲諸国皆此頒曆

第一月 三十一日 廿日

日輪入于宝瓶宮 日本十二月中氣入日

第二月 十九日

平年三十八日
閏年二十九日

十九日

日輪入于人馬宮 日本 十月中氣入日

日輪入于双鱼宮 日本 正月中氣入日

三十一日 廿一日

日輪入于白羊宮 日本 二月中氣入日

三十一日 廿日

日輪入于金牛宮 日本 三月中氣入日

三十一日 廿一日

日輪入于陰陽宮 日本 四月中氣入日

三十一日 廿一日

日輪入于巨蟹宮 日本 五月中氣入日

三十一日 廿三日

日輪入于獅子宮 日本 六月中氣入日

三十一日 廿三日

日輪入于室女宮 日本 七月中氣入日

三十一日 廿三日

日輪入于天秤宮 日本 八月中氣入日

三十一日 廿三日

日輪入于天羯宮 日本 九月中氣入日

三十一日 廿二日

第十二月 三十一日 廿一日

日輸入于磨羯宮 日本十一月中気入日

○藤林普山の『訳鍵』（文化七年1810序）星座の記号は略す。

Arruis	Oorn	白羊	戌
Taurus	Sier	金牛	酉
Geminj	Tweeling	双女	申
Canker	Kreeft	巨蟹	未
Leo	Leeuw	獅子	午
Virgo	Maagd	室女	巳
Libra	Waag	天秤	辰
Sohorpius	Soorpioen	天蝎	卯
Sagitarus	Schierter	人馬	寅
Capricornum	Steenbok	磨羯	丑
Aquarius	Waterman	宝瓶	子
Pisces	Vischer	双鱼	亥

○古雄南臯『遠西観象図説』（文政六年1823刊か）

この書ではオランダ語名が示されている。巻上の「国字類

黄道十二宮の星座名について

音」から十二宮名を抜粋する（いろいろは順である。原語の綴りは引用者が付したものである）。

白羊宮	ラム	Ram
人馬宮	スキユツテル	Scuttir
宝瓶宮	ワートル、マン	Waterman
双児宮	テウエー、リンゲン	Tweelingen
双鱼宮	ヒステル	Vischer
磨羯宮	ステーン、ボック	Steenbok
天秤宮	ワーゲ	Waag
天蝎宮	スコルピユーン	Scorpioen
金牛宮	ステール	Sier
巨蟹宮	ケレーフト	Kreept
獅子宮	レーウ	Leeuw
室女宮	マーグド	Magd

○佐藤信淵『鎔造化育論』（天保十三年1830序）

白羊・金牛・双児・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝎・人馬・磨羯・宝瓶・双鱼

○賀寿麻呂大人（宇田川榕菴）『蘭学重宝記』（天保十四年1843...）

Water man	宝瓶
Visser	双鱼
Oorn	白羊
Slier	金牛
Tweeling	双女
Kreepst	巨蟹
Leeuw	獅子
Maagd	室女
Weeg	天秤
Scorpioen	天蝎
Schieter	人馬
Steenbok	磨羯

○川本幸民『気海観瀾広義』（嘉永三年1850序）

太陽ハ二十四時ゴトニ我地球ヲ一周シ一年ニ日道ヲ一巡スト見ユ。故ニ此時節ヲ算セムガ為ニ十二宮ヲ設ケ、三十日ゴトニ一宮ヨリ他宮ニ移ルトシ、毎宮ノ間ヲ分チテ

（各三十度トナル。太陽一年ニコレヲ一巡ストナス。コレヲ以テ毎日太陽ノ所距各地太陽ノ高低ト四時ノ変アルコトヲ察スベシ。即三月二十一日太陽白羊宮ニアリ。コレヲ春ノ始トシ、四月二十日ニ金牛宮、五月二十一日ニ双女宮ニアリ。而シテ六月二十二日（或ハ二十四日トイフ）ニ巨蟹宮ニ至ル。コレヲ夏ノ始トシ、七月二十三日ニ獅子宮、八月二十四日ニ室女宮ニアリ。九月二十三日（或ハ二十二日トイフ）ニ天秤宮ニ至ル。コレヲ秋ノ始トシ、十月二十四日ニ天蝎宮、十一月二十三日ニ人馬宮ニアリ、十二月二十二日ニ磨羯宮ニ至ル。コレヲ冬ノ始トス。第一月二十日ニ宝瓶宮、二月十九日ニ双鱼宮ニアリ。白羊宮ハ赤道ノ中ニアリ、天秤宮ハ其東ニアリ。太陽ヲコ、ニ至レバ昼夜其長サヲ同ス。コレヲ昼夜平点ト名ヅク。磨羯宮ト巨蟹宮トハ回帰点ナリ。磨羯ヨリ双女ニ至ルマデ太陽南ヨリ昇ル。故ニ此六宮ヲ昇宮ト名ヅク。以テ他ノ六ノ降宮ト名ヅクル者ニ分カツ。白羊以下六宮ハ赤道ノ北ニアリ。天秤以下ノ六宮ハ其南ニアルナリ。此十二宮ハ曾テ星ノ聚マレル者ヲ標トシ、諸物ノ名ノ仮用シ、コレヲ弁別シ易カラシメム。猶都下ノ街区ニ諸般ノ名ヲ

命ズルガゴトシ。

(卷四・天体)

(漢名の見えない『紅毛談』は省く。)

3-4-2

前節に列挙した蘭学者の著作に見える十二宮の原語がラテン語からオランダ語に次第に変化しているが、そのことについては今は措き、宛てられている漢名を表にすると次のようになる

『明史』や游子六の『天経或問』、また西川如見の『両儀集』、西川正休の『大略天学名目鈔』に見える名称と利瑪竇の『坤輿万国全図』また井口常範の『天文図解』に見られる名称との違いはGeminiの「双兄」と「陰陽」、Virgoの「双女」と「室女」にあった。「室女」の名を用いている点で蘭学者たちの

	文字・	帰山・	訳筈・	星術・	全図・	蛮語・	西域・	訳鍵・	観象・	鋳造・	蘭学・	気海
	1743	1785	1778	1790	1796	1798	1798	1810	1823	1830	1843	1850
Art	白羊	白羊	白羊	白羊	白羊	白羊	白羊	白羊	白羊	白羊	白羊	白羊
Tau	金牛	金牛	金牛	金牛	金牛	金牛	金牛	金牛	金牛	金牛	金牛	金牛
Gem	双女	双兄	双女	双兄	陰陽	双女	陰陽	双女	双兄	双兄	双女	双女
Can	巨蟹	巨蟹	巨蟹	巨蟹	巨蟹	巨蟹	巨蟹	巨蟹	巨蟹	巨蟹	巨蟹	巨蟹
Leo	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子
Vir	室女	列女	室女	室女	室女	室女	室女	室女	室女	室女	室女	室女
Lib	天秤	天秤	天秤	天秤	天秤	天秤	天秤	天秤	天秤	天秤	天秤	天秤

黄道十二宮の星座名について

	1743	1785	1778	1790	1796	1798	1798	1810	1823	1830	1843	1850
	文字・帰山・訳筈・星術・全図・蛮語・西域・訳鍵・観象・鎔造・蘭学・気海											
Scor	磨羯 <small>トコ</small>	天蠍	天蠍	天蠍	天蠍	磨羯 <small>トコ</small>	天蠍	天蠍	天蠍	天蠍	天蠍	天蠍
Sag	人馬	人馬	人馬	人馬	人馬	人馬	人馬	人馬	人馬	人馬	人馬	人馬
Cap	天羯 <small>トキ</small>	磨羯	磨羯	磨羯	磨羯	天蠍 <small>トコ</small>	磨羯	磨羯	磨羯	磨羯	磨羯	磨羯
Aqu	宝瓶	宝瓶	宝瓶	宝瓶	宝瓶	宝瓶	宝瓶	宝瓶	宝瓶	宝瓶	宝瓶	宝瓶
Pis	双魚	双魚	双魚	双魚	双魚	双魚	双魚	双魚	双魚	双魚	双魚	双魚

多くは利瑪竇の『坤輿万国全図』系の名称を用いていると言える。しかし、「双兄」ではなく出自不明の「双女」を用いている者が多いのは、何らかの理由があると思われるが、いまだ明らかにしえない。「双女」は『明史』などでは異なる星座のVirgoの名として用いていたものであった。「双兄」はギリシャ神話ではGeminiは男の双子であり、西洋の星座にもそのように描かれているものである。司馬江漢と本田利明が『明史』などに做って「陰陽」を用いているが、後に司馬江漢は「双兄」を用いるようになる（刻白天文図解）。「陰陽」の名は、『密教辞典』に「夫婦宮」「男女宮」の異称があることを紹

介しているが、「陰陽」の名も同様の思想的背景から考えられた名であろうが、蘭学者たちはこれを嫌ったようである。『山録』に「列女」とするのは彼等が見た星座の像が「其形双ななべる女二人を画かたる形」（『紅毛談』）であったからと思われる。ともあれ、蘭学者たちは蘭語から新たな訳語を創出することなく、既に存在した漢名を利用していることは注目しておく

4

現在日本で用いられている星座名の和名の成立については先

に述べたが、漢名の源流はどこにあるのだろうか。改めてその現在の漢名(A)と『明史』また『天経或問』に見られるもの(B)、利瑪竇の『坤輿万国全図』に見られるもの(C)、および蘭学資料のうちで最も新しい川本幸民『氣海観瀾広義』に見られるもの(D)を並べて掲げれば次のとおりである。

【A】白羊・金牛・双児・巨蟹・獅子・処女・天秤・天蝎・

人馬・磨羯・宝瓶・双鱼

【B】白羊・金牛・陰陽・巨蟹・獅子・双女・天秤・天蝎・

人馬・磨羯・宝瓶・双鱼

【C】白羊・金牛・双児・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝎・

人馬・磨羯・宝瓶・双鱼

【D】白羊・金牛・双女・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝎・

人馬・磨羯・宝瓶・双鱼

この対照表によれば、特定の書物を限定することはできない。いずれに拠ったとしても、「双児」と「処女」の名は、明治以降に和名によって作られたものと推測される(『二儀略説』には「二子宿」「小女宿」とあった)。

黄道十二宮の星座名について

ところで、先に触れておくべきであったが、「十二宮」という名は密教で既に成立していたものである。蘭学者はそれを『waalf teekenen van de zodiac』の訳として用いている。前野良沢の『和蘭訳筌』に「デ タワアルフ 十二 テェケン 紀ハン之 デン 発語辞 ソチアカ道(即黄道ノ十二宮ナリ)」とあり、『蛮語箋』にも「十二宮 トワルフ、テーケン」と見え、『遠西観象図説』の「国字類音」(巻上)にも「十二宮 トワルフ、テーケネン、ハン、デ、サヂヤク」と見える。また、『元和航海書』に「十二獣ノ名」とあったが、十二宮を獣帯とも言う。これはオランダ語からの直訳のようである。『遠西観象図説』の「国字類音」に「獣帯 デーレン、リーム 年圈の別名」とある(Dierenienのdierは動物、獣。riemは動物などをつなく革ひもの意である)。この獣帯は後に英語のZodiacの訳としても用いられた。Dierenien 獣帯の名は星座の形の多くが獣であることからきたものだが、『蘭学重宝記』には、

天学家、黄道を十二に分て十二宮と名く。太陽の躔度を定んが為なり。毎宮を生類の形に像れり。又記号を作て其名に代へ書す。これ唯記憶し易きに取るのみ。実に天上に如

此ものあるにあらず。然れども其名と命ずる拠なきにあらず。たとへば羊の游牡^{さか}する比、太陽の躡る宮を白羊宮と名け、牛の游牡する比、太陽の躡る宮を金牛宮と名るが如し。太陽宝瓶宮に躡る時を冬至とし、獅子宮に躡る時を夏至とす。

とある。Aries (白羊宮)、Taurus (金牛宮) の命名の由来をこのように説明している蘭書が当時伝来していたのであろうか。Aquarius (水瓶宮) の名も、星座発祥の地のメソポタミア地方では太陽がその付近を通過する頃が雨期であったことからその名が付けられたと言われている。

おわりに

本田利明の『西域物語』に「日本の人、中人以上の人といへども、星の事^をは一向に心を不^レ寄、甚きに至ては星は雨の降る穴^かと思ふも間々有」とある。それから二世紀余り、現代においては、星を雨の降る穴と見るような人はいないであろうし、星座を天球に貼り付いたものと思つている人もいないであろう。今日の天文学は高度に進歩している。天体現象を見たまに説明した幾何学的天文学は十七世紀までのことであり、その後は

ニュートンの力学から発展した天体力学や精密機械による観測天文学へと変化し、現在では電波やX線を使って、宇宙の構造や生成まで考えるまでになっている。そこでは全天に存在する大小の恒星を可能な限り書き込んだ星図が用いられことはあつても、目に付くいくつかの星を選んで絵模様を描いた星座図はあまりに素朴に過ぎ、過去の遺物であるように見える。にもかかわらず、我々は夜空を仰いで輝く星を線で結び、あの絵模様を頭の中に描いてみるのはなぜだろう。いかに科学が進んでも人の運命を明らかにしえないかぎり、星占いは廢れることはないであろうと言われる。星座もまた忘れ去られることはないであろう。しかし、その理由は異なるものと思われる。宇宙の始まりや構造を考える現代天文学に我々は俗塵を離れた壮大なロマンを感じるが、我々は同様のものを感じながら星座を見上げていくように思われる。紀元前三千年頃メソポタミア地方の羊飼いたちによって作られた黄道十二星座などの原型はギリシヤに伝えられ、ギリシヤ神話と結びついて、夜空には神々の物語が溢れることになった。今も昔も同じような思いを託して我々は夜空を見上げつづけているようである。

《注》

- (1) 十二の領域(星座)は「宮」とも「宿」とも呼ばれ、また「座」とも呼ばれる。その区別を向井元升の『乾坤弁説』(明暦二年1656成)は次のように説明する(貞巻・第二十六「星辰之数并其光相之事」)。

弁説、右南蛮学士の説如し是、其云、四十八宿とは四十八座なるべし。儒家、曆家に宿と云は、日月運行の道に列たる二十八を宿と云ふ也。此外は皆座と云也。日月運行の道理を十二宿とするは、十二月に應じて云也、是も儒には宿とは不レ云、宮と云也。然れども宮も似たることなるべし。然るに二宮は三十度あり、則一回十二宮也。此十二宮の間に列りたる星二十八座あり、是二十八宿也。二十八座の星は其宿の主人のごとく、日月五星の其所を運行するに往來の客のごとし。

なお二十八宿以外の一般の星座は「天官」「星官」などとも呼ばれた。

- (2) ただし、地球の自転軸が二万六千年を周期として移動する歳差のため現在では星座とその領域の対応にズレが生じている。
- (3) 大崎正次著『中国の星座の歴史』(雄山閣、昭和六十二年1987五月刊) p.100
- (4) 村上忠敬著『天文学史』(山雅房、昭和十八年1943七月刊)

黄道十二宮の星座名について

p.20

- (5) 同右 p.31

- (6) 高田修「東寺の両界マンダラ」(『佛教藝術』47、昭和三十六年1961十一月発行)

- (7) 村上忠敬著『天文学史』注(4) 口絵

- (8) 石元泰博著『両界曼荼羅 東寺藏国宝』(伝真言院両界曼荼羅の世界)平凡社、平成二十三年2011十一月刊)

- (9) 村上修一著『日本陰陽道史話』(大坂書籍館、昭和六十二年1987二月刊)第八章「密教と陰陽道」

- (10) 野尻抱影編『星座』(恒星社厚生閣1983刊)巻頭図版Ⅷ。この星曼荼羅については同書に収められている藪内清「中国・朝鮮・印度の星座」に詳しいが、いつ頃のものかは未詳のようである。

- (11) 村上修一著『日本陰陽道史話』注(8)第八章「密教と陰陽道」

- (12) ちなみに、回回曆(イスラム曆)法およびアラビア天文学を中国で紹介した貝淋(？1490)の『七政推歩』(明・憲宗成化十三年1477成)には黄道付近の星座として「双魚・白羊・海獸・金牛・人・陰陽・巨蟹・獅子・双女・天秤・天蝎・人蛇・人馬・磨羯・宝瓶」の十五座が見える(陳久金「貝淋与《七政推歩》」『宁夏社会科学』一九九一年第一期)よ(2)。

(13) 野尻抱影編『星座』第V章「中国・朝鮮・日本・印度の星座」(敷内清著) p.147. また、藤井讓治・杉山正明・金子章 裕編『大地の肖像』第十四章「東アジアにおける楊子器図の展開」(井上充幸著) p.284.

(14) 「野牛の角の宿」は「野牛の宿の角」の誤りではないかと思われる。かつては恒星を指示する時には「乙女」の持てる麦の穂「オリオンの帯」などといった言い方がなされていた。

(15) 石田五郎著『天文屋渡世』(みすず書房2011.1) P.25

(16) 尾原悟訳著「ベドロ・ゴメス著『天球論』(試訳)」(『ギリシタン研究』第十輯吉川弘文館昭和四十年1965三月発行、広瀬秀雄「小林謙貞と二儀略説」(『日本思想大系63』『近世科学思想下』解題) など。

(17) 付け句の作者の長頭丸には北村季吟の『山の井』に「ありしだい、うす雪きやせけふの雪」の句もあり(「だい、うす」は Deus (神・天主)、松永貞徳は『排耶蘇』で知られる慶長

十一年1606の儒学者林道春と改宗禪僧不干ハビアンとの対論の仲介者であった。

【附記】初校後、大槻玄沢の『暁港漫録』(天明元年1781)寛政

五、六年1793、4成の巻之一に(ラテン語名、オランダ語名は略す)、

白羊 金牛 陰陽 巨蟹 獅子 処女 (右在赤道以北者)
 天秤 摩羯 人馬 天羯 宝瓶 双鱼 (右在赤道以南者)

とあるのに気づいた。「陰陽」「処女」、特に「処女」の名は和名との関係で注目される。